慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥井先生と都市社会学 : 都市社会学に残された大きな足跡
Sub Title	Dr. F. Okui's, contribution to Japanese urban sociology
Author	大道, 安次郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.11/12 (1965. 12) ,p.1122(20)- 1131(29)
JaLC DOI	10.14991/001.19651201-0020
Abstract	
Notes	奥井復太郎博士追悼特集 追悼の辞
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651201-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥井先生と都市社会学

——都市社会学に残された大きな足跡——

大道安次郎

献辞

卒然として奥井先生のみ霊は昇天された。地上にある私たちは、痛惜の感に打たれながら、先生が母校慶応義塾大学の教授として、学部長として、学長、塾長として、さては国民生活研究所長として、またよき家庭人として、さらにまた学者として、地上に残された数々の偉大な業績を仰いでいる。いま先生の母校である慶応義塾大学経済学部の機関雑誌「三田学会雑誌」が先生の偉業を追憶し、記念するための特集を企てられ、編集の方から私にも一文を寄せるようにとの懇切なご依頼を托された。塾出身者でもなく、しかも学界の一後輩にすぎない私にとっては、まことに光栄至極であり、この機会を与えて頂いた「三田学会雑誌」編集部のご厚意に深謝するとともに、天上の先生のみ霊よ安かれと祈願しながら、謹んでこの稿を草する次第である。

私は先生が会長をされていた日本都市学会の理事をつとめており、また先生が会員であった日本社会学会では常務理事をつとめている。そのために公私とも何かにつけてつねに御世話になり、また御教導にもあずかった。こうした関係で、私は先生の学問的な業績、とくに日本の都市社会学に残された偉業の一端についてしのびたい。

（一）

先生は日本都市学会の会長の席に就いたままで昇天された。戦後新たに日本都市学会が発足し、その第一回の全国大会が昭和二十九年の秋に京都で開かれた。先生がその初代会長として就任され、再任を重ねて引続いて会長をされていた。合理性とデモクラシーを重んずる学会、しかも近代性を具現化している都市を研究対象としている都市研究者の集りである都市学会が、先生にこのように長く会長に就任して頂いたのは、先生に任かしておけば大丈夫だという会員一同の間に信頼感があったからであろう。先生の人柄、学識、指導力が然らしめたといえよう。

日本都市学会は先生の会長在任中に文字通り全国的規模を誇りうる存在にまで成長した。関東都市学会、関西都市学会、中部都市学会、東北都市学会、九州都市学会、北海道都市学会などが全国各地域に設けられた。昨年（昭和三九年）五月に、十周年を迎えた日本都市学会の大会が、先生の母校である三田の慶応義塾大学の新装なった学舎で開催された。そしてさらに学会の飛躍的発展の企ても議せられたのであった。

会長としての先生は、毎年開かれる大会にはもちろんのこと、全国都市問題会議にも出席され、会長として、あるいは主題報告者としての責務を果されたり、あるいは国際都市問題会議（昨年夏、東京で開かれたアジヤ・メトロポリタン・プランニング・コンファレンス）でも主催者側として活躍されたりした。私も学会理事であったので、よくお伴する機会に恵まれた。さらにまた日本都市学会が都市総合開発のための基礎調査や基本計画作成を依頼されたときには、多忙な時間をさいて各地に赴き、第一線に立って統率された。日本における都市の総合調査、マスター・プラン作成の方法について残された足跡も大きい。

日本都市学会は全く掛替えのないよい会長を失った。しかも突如としてである。しかし学会は悲しみを秘めながら、さらに飛躍を期することこそ先生に報ゆる所以であるとして、陣容を新たにして出発することになった。本年（昭和四〇年）五月の福岡での日本都市学会の大会の席上で、さらに七月での箱根で開かれた理事会で、これらのことについて議を重ねたのである。そして会長としての先生の遺徳をしのぶために、日本都市学会の名において「奥井賞」を設けることにした。この賞の新設は、学会としてははじめてのことであるが、先生が学会にとって如何に掛替えのない貴重な方であったかを如実に示しているといえよう。

（二）

ところで先生が日本都市学会の初代会長として選出され、引続いて再任を重ねられたことは、先生の人柄や統率力に拠ることはもちろんであるが、先生は極めて優れた学者であったからでもある。というのは、学会である以上は、その会長は優れた一流の学者であることが何よりも必要条件であるからである。先生はこの点においても十二分の条件を充されていたことについてはいまさら申すまでもない。

私はこの機会に改めて、私なりの立場から、先生の都市社会学に残された大きな足跡をふりかえってみたい。

奥井先生といえば誰しも「現代大都市論」を想起するであろう。この書物は昭和十五年に有斐閣から出版されている。本文だけで七四三頁に及ぶ大著であるばかりではなく、現在のように都市問題が人々の口にのぼることが稀れであった時代に、この大著が彗星のように現われたのである。だから先生はわが国における都市社会学の最初の開拓者だといえよう。そして現在でもその光芒は強く尾を引いて輝いており、都市社会学を学ぶ者にとっては、必読の書物とされている。単に未踏の新しい学問の分野を切り開いたばかりではなく、現在の進んだ都市社会学の水準からいっても、いまなお一流の書物としての存在に堪えうるだけの内容を持っているのである。本書はまさに都市社会学のバイブルだといえよう。

ところで先生はどうして当時殆んど学界では取りあげられていなかった「大都市」の問題と取組まれたのであろうか。その間の事情の一端を、「現代大都市論」の序でつぎのように述べている。曰く、「慶応義塾大学経済学部では昭和二年に「都市経済論」の講座を設け、私が担当を命ぜられたが、之れは大学教程の社会科的構成を企図せられた故堀江帰一博士の所懐の一表現であった。爾来十数年、都市及び都市問題の何たるやに就いて不敏の身を顧ず講義と研究を続けて来た。茲に呈する本書は其の間の私の仕事の成果である。私の研究分野は都市、殊に現代大都市の経済・社会的解明であって、都市経営とか都市行政とかは直接には問題の埒外にある。私は都市現象の正しい理解の上に立ってこそ立派な都市の経営も政治も可能であると信ずるが故に、都市の本質を究明することを以って第一の課題とするのである。此の意味で私は現代都市として典型的な大都市丈けを研究の対象としてゐる。」と。この序の言葉で明らかなように、昭和二年から開講された「都市経済論」を先生が担当されたことが本書をまとめる直接の機縁となっている。都市経営論（都市企業、都市財政論）や市政論は当時としてはそう目新しい講座でなかったかも知れないが、都市経済論は全く新しい講座で、この新しい講座を経済学部に設けたことは、当時の堀江帰一学部長の先見の明とそれを支持した学部教授会の開放的な自由な空気が然らしめたのであろう。先生の「現代大都市論」の背後にはこうした事情があった。

しかし「都市経済論」の講座は新しく開講されただけに、先例がないところから講義の内容をどうするかについては全く先生の自由に任かせるといった格好であった。全く手さぐりで自分で開拓してつくり出していかねばならない新分野であったことが、先生をして先人未踏の「大都市論」という金字塔を打ち建てさせたともいえよう。先生は大正九年（一九二〇年）に慶応義塾大学理財科（のちに経済学部となる）を卒業され、助手となって都市研究をテエマとすることになった（学者が自分の専攻するテエマを決める場合、自ら選ぶこともあろうし、他から選ばされることもあろう。いろいろな起縁によって決めるのである。

「見えざる手」の働きを思わざるをえない。先生が都市研究をテエマとすることになったのは、天が若い英知を嘉みしてのことであろう）。そして大正十三年にドイツに留学し、昭和二年に帰朝して、この講義を担当したのである。助手時代に産業革命と都市という課題に取組んだり、東京市長の後藤新平氏がチャールズ・ビアード博士を招いて開いたセミナーに出席したり、ジョン・ラスキンの社会思想の研究に没頭したりしながら、暗中模索の格好で都市研究を続けていたようである。ドイツ留学中は、ドイツの中世都市の魅力に圧倒されて、「アルト・シュタットに魅せられた男」と友人たちにいわしめたほどである。当時を回想して、先生はつぎのようにいっている。「中世都市は本当に素晴しかった。廻らされた城壁と城門、その裡にぎっしり建てこまれた家屋、中央に聳える教会とその尖塔、ラート・ハウス、その前面にひろがるプラッツ等は、それらいちいちの建築についてでなく、コムパクトな集団生活の形体として、これあるかなの感を十分に与えてくれた。ここにコムミュニティーがあるという啓示であった。この感得がラスキンの直接の影響であったのはいうまでもない。勿論それは私の内面的な関係においてである。教会の塔は何故に天に向ってかくも高いかという質問に対してラスキンは、それは人々の神に対する渇仰のゆえにと答える。生命と摂理、そして生けるもののより高いものに対する精進とそのための闘争、そうした事から生れる形体における調和、そういうものとして自然美を謳うラスキンの観察解釈がそのまま、私の中世都市観になったといって差支えなかった。同時に今日なお、これが私の綜合観の基底になっている事も否めぬことである。」と（「都市問題研究」一九五九・二「都市研究への一回顧」五頁）。ドイツ留学中に先生は中世都市の形体のうちにラスキンの精神を見出し、それを土産にして帰朝したといえる。

だが先生が「大都市論」を完成させるまえに、アメリカのシカゴ学派の都市社会学に関する一連の業績との出会いのあったことを見逃してはならない。学者が自分の専攻しているテエマに関連して、新しい学説に出会うことは、何か運命的なものを感じさせる。先生はシカゴ学派との出会いについて、「それがどんな機会にどう入手され、私と都市社会学の最初の接触になったかについては不思議と記憶が十分でない」といわれているが（上掲論文六頁）、第三者から見れば、シカゴ学派との出会いは、先生をして「都市経済学」への道を歩まずに、「都市社会学」への道を歩ましめたといえる。それはまさに都市社会学者としての先生を誕生させた決定的な瞬間であったばかりではなく、日本の都市社会学の誕生の一瞬でもあったといえよう。

このシカゴ学派との出会いによって、「大都市論」の構想が芽生えたのであるが、当時としてはシカゴ学派の導入は恐らく先生を除いては、東大の戸田貞三教授（故人）を数えるのみであろう。だから本書に接して多くの人は、先生はアメリカのシカゴ大学で勉強されたのではなかろうかと思うであろうが、事実は然らずである。というのは、先生がアメリカにゆかれたのは戦後のことであり、「大都市論」はすでに戦前に出版されているからである。とすると、先生とシカゴ学派との出会いは何時頃であったか。それは恐らく帰転後まもなくの時期であったであろうことは容易に想像される。というのは、その頃パークを中心としたシカゴ学派の都市社会学の叢書が続々出版されており、新しい講義の準備のために文献資料を集められているときに、たまたまパークの画期的著作と出会ったのではなかろうかと思われるからである。中世都市とは全く趣きを異にしたシカゴという新興の大都市を社会学の実験室として新しく誕生した都市社会学の成果を、江戸ッ子として育った先生が、大都市東京の研究のなかに生かし、「現代大都市論」として美しい実を結んだといえないであろうか。

このように見てくると、先生の「大都市論」は、自然美の調和を謳うラスキン、中世都市、シカゴ学派の都市社会学が三位一体となって形成されたといえる。そしてわが国で最初の本格的な都市社会学の書物が誕生したのである。これまでの都市研究は、文明評論的であったり、市政論的であったり、経営論的であったりしたが、これらの研究段階を越えて都市社会学の時代、ソーシャル・プランニングの時代へのマイル・ストーンを築いたのが「大都市論」である。このことは本書の特色を見ればよくわかる。本書の特色をつぎのように要約することができよう（上掲論文六～七頁）。

一、本書はその書名が示しているように現代の大都市を研究対象にしている。都市一般ではなく、現代の大都市に限定している。大都市こそ現代社会の代表的典型であるからである。

二、都市を単なる人口集団としてとらえずに、都市の本質を中心（中枢）機能の地域的結集に求め、生活基盤（社会組織）――生活体系――生活理念という構造で都市現象を眺めようとしている。

三、形体と生活との不可分離な関係を強調することによって、これまでの都市計画が単に土木建築の工作に終始しがちなのに対して社会的意味や理念を附加しようとしている。

四、さらに進んで生活設計、ソーシャル・プランニングを都市論に結びつけている。

五、研究方法として社会調査を強調し、都市綜合調査の必要を説いている。

以上が主なる特色であるが、現在の都市社会学の水準での問題点をすでに十二分に展開していることに気がつくであろう。私が本書を目して金字塔を打ち建てたとか、エポック・メーキングな書物だとかいったことも故なしとしないであろう。わが国における本格的な都市社会学の研究は本書によって一歩を踏み出されたのである。本書はまさに「都市社会学事始」の書といえよう。

（三）

「現代大都市論」を公刊されたのちも、先生は大学関係の忙しい日々の間に、学界ではつねに第一線の活躍をされ、「都市問題」や「都市問題研究」その他の専門雑誌につぎつぎと論文を書かれ、また後進の指導にも心をくばられていた。そして絶えず学界に新しい問題を投げかけていられた。その若干について触れてみよう。

その一、都市社会学の学問的地位についての問題である。これまで都市の社会学だとか農村の社会学だとかは一般の社会学から区別して考えられていた。先生もはじめはそう考えていられたが、それは大きな誤りだったというのである。というのは、社会学の目指すところは、社会学的本性または人間性の社会的探求にあるから、都市という社会体において、それがどのような現れ方をするか、換言すれば、置かれている条件を変えることによって、人間性の方にもどのような変化・不変が生れるか、その観察によって本質的なものの把握、対応過程など社会学自体の中心的課題への努力が示されるのであるから、都市社会学をとくに一般の社会学と区別する必要はない。社会学は社会を研究対象としているが、現代の社会は大都市を以って代表されるから、都市社会学は即ち社会学といえる。そして「シカゴ大学は大都市シカゴそれ自体を以て、社会学のラボラトリーとよんでいた」のもこうした理由からであろう。以上が最近の先生の提出された都市社会学の学問的位置づけについての問題である（上掲論文八頁）。

その二、都市研究における綜合調査の「綜合」とは何を意味するか、その綜合の原理は何に求めるべきかという問題の提出である。先生は都市の研究に社会調査方法をわが国では、東大の戸田教授が家庭研究に導入されたのとほぼ同時に、導入されている。この意味において、戸田教授とともに先生の業績は高く評価されねばならない。ところで都市は極めて多面的である。ある特定の立場からの調査だけでは、都市の全体像をつかむことはできない。各方面からの調査を綜合してはじめて、都市の全体像がつかめるのである。綜合性の必要は十分認められるが、さてその「綜合」は如何にして可能であるか、綜合の原理を何に求めてよいかということになると必ずしも明らかでない。これが先生が提出された問題である（上掲論文一一頁。その他「都市問題」などでも言及されている）。

その三、先生は「都市学」という新しい学問の成立は果して可能であるかどうかという問題も提出されている。「都市学」の成立可能についての先生の見解には若干の変化がある。たとえば、一九五四年五月号の「都市問題」（五頁）では、いわゆる「都市学」が成立する、あるいは、成立すべきものであると考えているわけではない、といわれているが、一九五九年

二月号の「都市問題研究」（一一～一二頁）では、都市を主体とする限り綜合科学的の建前に到るのが必然ではないかと思う、とかなり積極的な発言をされているからである。この点を補う意味で、先生のゾンバルト批判について一言しておこう。ゾンバルトはシカゴ学派の都市研究に対して、一つ一つのモノグラフとしてはかなり成功を収めてはいるが、その方法によって学問として体系化されたものを提供していないと批判している（「大都市論」六九頁）。このゾンバルドの批判に対して、つぎのように批判している。「彼は都市現象に対して一つの系統的な観点から、厳重に裁断した一面を見よというのである。つまり経済学の厳しい観点から都市を分析観察してかくかくのものと断定する事を以って正しいと考えるようである。そこでは精確に限定された、各基礎科学の系統が都市をそれぞれに分解していく。都市そのものを主体化して、それを研究の対象にしようとするものには、かかる方法では解剖され肢体化した都市のバラバラが残るだけに思われるのも当然であろう。」と（「都市問題研究」上掲論文一〇頁）。先生のこの批判は都市そのものに即して、都市を主体として、その全体性または統一性をつくり上げようという企図に根ざしているといえよう。この点について先生はつぎのように発言している。「理論化の過程は抽象の手法を以って進む。抽象が厳密になればなる程、理論の厳正さは確保されるが実体からの隔離は高まる。この場合、われわれにはこの隔離の幅、並びによって来るところを当該科学外の観点から観察する事は許される。例えば経済的要因の決定が百パーセントでない時、その部分について如何なる経済外要因が作用しているかを調べる事は不可能でない。この様にして諸々の要因の交錯して作用しているところの理を明らかにしていけば、都市実相の把握も不可能でなく、ここに綜合的な研究の成立する可能性がある。この意味に於いて都市を主体とする限り綜合科学的の建前に到るのが必然ではないかと思う。」と（上掲論文一一～一二頁）。

なお忘れてならないことは、都市の綜合調査を通して、都市の基本計画（マスター・プラン）の手法を実施するために示された先生の並々ならぬ熱意である。そして都市建設にヒューマニズムの尊重を説いたり（「都市問題」所載論文、一九五九・五）、社会開発の必要性を力説したりしている。しかしここにもまたさきの「綜合性」の問題が引っかかってくる。若き日の先生の魂に宿ったジョン・ラスキンの精神――生命と摂理、そして生けるもののより高いものに対する精進とそのための闘争、そうしたことから生れる形体における調和、自然美を高らかに謳うラスキンの讃歌――が先生の綜合観の基底に横たわっているように思われる。

以上が先生が私たちに提出された主な問題である。先生はこれらの問題について必ずしも断定的な結論を下していないようである。たとえば、その二の問題については、「日本都市学会はこの様な企画について真剣に取り組みながら、なおその綜合性については定説を欠く。」（上掲論文一一頁）といわれているし、その三の問題についても、「綜合性そのものに就いてなお、いろいろの意見もある事であって、これらの点諸家の御教示を仰ぎたいところである。」ともいわれている（上掲論文一二頁）。

先生の提出されたこれらの問題は何れもまだ未解決の問題である。先生は率直に自説を開陳しながら解決を謙譲に後世にゆだねている。後進の私たちはそれにどう答えるか、日本都市学会もまた全力を結集してその解決に努力すべきであろう。これこそ日本都市学会の会長として、また都市社会学の開拓者としての先生の残された偉大な業績に報ゆる所以のものであろう、と私は思っている。

（一九六五、八、三〇、宝塚紅葉谷にて謹記）